

編集後記

本号が会員諸氏の手が届く候は師走のあわただしい時期であろうが、今月号は原著論文が比較的多く良いバランスとなっている。日消外会誌は本年1月より編集委員の輪番制で編集後記を担当することになり、今回は小生におはちが回ってきた。本学会誌が編集後記を巻末に登場させることになったいきさつは、常日頃には黒子として存在する編集委員が何を思い会誌編集に従事しているのかを少しでも会員諸氏、投稿者にご理解いただくことにもあると思っている。ただ、珠玉の小編を記すにはあまりに文才に乏しく、今回は編集委員会の雰囲気の一部をお伝えして責を果たしたいと思う。

編集委員会は8月を除く年11回、大部分の委員の出席の元に査読論文一編一編について議論される。各委員より論文内容から論文タイトルに至るまで様々な意見が出され、委員長がまとめるという形である。編集委員は各々の専門分野のみの査読を行うわけではなく、専門領域外の論文を査読する機会の方が多い。このことは査読者が既成概念にとらわれることなく、逆に素直に論文の内容、構成に入ってゆけ本質的な指摘を行うことを可能にしていると思っている。編集委員会では不採用は少なくすべく努力をしているが、現実にはかなりの率で不採用とならざるを得ない。ただし、不採用論文に関しての編集委員会の議論もきちんとしたものである。逆に編集委員を悩ませる既成の通念のワクから飛び出した方法論、ideaにもとづく論文も議論沸騰することが多い。時には全員での査読を行うこともある。最後に各査読者の指摘、意見、編集委員会における論議内容をまとめて投稿者に査読要旨としてお送りするわけである。投稿者が十分それを吟味、理解して再投稿いただくことは大いなる喜びであるが、時には査読意見に対する主張を持った反論も歓迎する。以上、とりとめのない後記となったが寒さの中、会員諸氏のご健勝をお祈りする。

(熊谷 一秀)